

「社会形成への参画意識を高める社会科授業構想」

—地域素材の教材化を通して—

教育学研究科 教育実践創成専攻 教育実践開発コース 教師力育成分野 梶原拓也

1. 研究の背景と目的

技術革新は子どもたちの生活環境を大きく変化させている。総務省調査(2020)によると、小学生のタブレットやスマートフォンといったモバイル端末保有率は39.9%、SNSを利用している児童の割合も24.1%となっている。また、山梨県教育委員会調査(2018)によると、地域での大人と子どもの関わりが「以前より少なくなっている」「ほとんどなくなっている」との回答が5年前との比較で4.9ポイント増加している。このように、インターネットによる人同士のつながりが小学生にまで広がってきており、おそらく今後もその傾向は続くであろう。この状況に対応するため、学校教育は、さらに様々な対応が求められることとなる。

例えば、地教行法改正(2017)では、学校運営協議会が努力義務となり、地域と一体となって特色ある学校づくりの中で、教育活動を進めることとされた。

また、文部科学省(2020)では、子どもたちが未来の創り手として必要な資質・能力を育むための「社会に開かれた教育課程」の理念において、「社会とのつながりの中で学ぶことで、子どもたちは、自分の力で人生や社会をより良くできるという実感を持つ」と示した。

これまでも学校現場では、子どもたちにとって身近な社会である地域を扱う小学校第3学年の社会科において、各小学校でその学校の実情に合わせた教材が開発され、また自治体ごとに副読本や資料集が作成されるなど、数多くの取組・実践がなされてきた。

しかし、単に教科書から学ぶのではなく、人と出会い、体験的に地域から学ぶことを通

して人同士のつながりを高めるといった実践の必要性は、さらに高まったといえる。

こうした背景を踏まえ、本研究では「つながり」に着目した授業構想を目指した。「つながり」は多様な捉え方をすることができる便利な言葉である。そこで、「つながり」を、自分を取り巻く社会との結びつきに対する認識と捉え、社会形成への参画意識を表す言葉と位置付けた。特に、社会科の学習が始まる小学校第3学年においては、まずは身近な社会としての地域を認識することによって、その地域の一員としての自覚が生まれ、「つながり」の土台が築かれるはずと考えた。

また、小学校第3学年の社会科における社会形成への参画意識＝「つながり」を高めるための授業構想を検討・提案することを目的とし、その手だてとして「地域素材の教材化」に着目した。

教科書にはない、自分自身が生活する地域を素材にした教材から学ぶことによって、子どもたちは、自分が地域の一員であるという意識を高めるであろうと期待した。

2. 「社会形成への参画意識」の姿

子どもの社会形成への参画意識に関わって、本多(2014)は、ロジャー・ハートによる「参画のはしご」(図1)を取り上げ、サービス・ラーニングに注目して「ボランティア体験を含む様々な学校外活動が、学校内の学びと相乗効果を得ることができるよう教育活動を行うことが必要になる」と指摘している。

また、山下(2009)は、ハートの理論にもとづく実践例を整理し、「参画のはしご」とハートの志向性が「子どもが民主主義を理解し、

実行し、それが地域に根付くことを最大の目的」としていることを指摘して、「日本の社会的側面を考慮した子ども参加論を確立する必要がある」と考察している。そして、子ども個人の参加に注目し、「属する実践共同体における関係性の変容」として捉えることを示している。

小学校学習指導要領(2017)第3学年の社会科の目標には、「(3)社会的事象について、主体的に学習の問題を解決しようとする態度やよりよい社会を考え学習したことを社会生活に生かそうとする態度を養うとともに、思考や理解を通して、地域社会に対する誇りと愛情、地域社会の一員としての自覚を養う」とある。

小学校第3学年を対象とする本研究では、「参画のはしご」に至る前の段階として図1(a 1存在に気付く),(a 2つながりに気付く)を設定した。a 1は自分の周りに地域や社会が存在するという学習や経験を通して気付く段階であり、a 2は自分も地域や社会を構成するという一員であることに気付く段階である。この概念を学習指導要領に従い説明すれば、a 1からa 2に変容する過程においては、地域社会についての「思考や理解」が必須であり、その思考や理解の過程におい

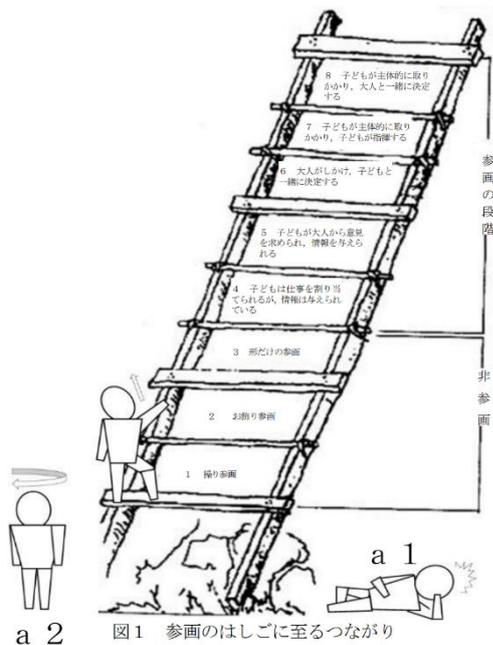


図1 参画のはしごに至るつながり
(『子どもの参画』に加筆)

て「地域社会に対する誇りと愛情、自分も地域社会の一員であるという自覚」が求められるということになる。この変容する過程において、魅力ある地域の教材から学ぶことができれば、誇りと愛情が育まれるものと考えられる。

山下の示す「属する実践共同体における関係性の変容」をベースにしつつ、本研究では、このa 1からa 2への「つながり」の変容・成長過程を研究対象とし、この過程において「地域社会に対する誇りと愛情、地域社会の一員としての自覚」を涵養するため、どのように地域素材を教材化すべきか、教材化した地域素材をどのように展開すべきかを解明していく。そして、社会科のスタートである小学校第3学年段階において求めたい「つながり」の姿について提案することを目指していく。

3. 「地域」の設定

小学校学習指導要領解説社会編(2017)では、「身近な地域や市区町村」という言葉で第3学年の学習のフィールドを示している。

しかし、小学生が実感している“身近な地域”が学習指導要領で示される「身近な地域」と同じであるかについては、「身近」が距離的な関係によって作られる認識なのかなど検討すべきである。

対象児童に実践に際して行ったアンケート(表1)では、家族と日常的によく行く場所として、買い物をする場所が多く挙げられた。郊外の大型店舗を回答する児童が多く、自家用車や交通網の発達により自宅の周りが生活の中心には必ずしもなっていないことが明らかになった。通学区域内の公園や学校の回答数もわずかであり、子どもにとって自宅や学校の周りは、身近さを感じる場所とはなっていないことが推察される。

これらから、学習指導要領が示す「身近な地域」については、身近な地域=通学区域と拙速に断定すべきではないことがわかった。また、指定校変更や区域外就学、学校選択など学校の周りに住居をもたない児童もいるこ

とに留意する必要もある。

「子どもだけでよく行く場所」について見ても、通学区域内の公園が最も多い結果とはなったが、家族と日常を過ごす場所と比較して圧倒的に回答数が少なく、アンケート中に「行かない」という声も聞こえ、未記入の児童が多かった。この点については、COVID-19の影響もあり家庭内で過ごすことが多くなったとも推察されるが、そもそも学校外で遊ぶ機会が少ないと捉えることもできる。

梶島(1994)は、子どもたちの行動に着目した千葉県浦安市の小学校第5学年 224 名を対象とした調査において、「通学区域というものが子どもたちに生き生きとした生活を提供する、内実豊かな空間であることを意味するわけでは残念ながら」とし、生活の中心は自宅であることを明らかにしている。この点に関しては、対象校児童の実態も同様といえよう。

表1 アンケートの結果(人:3つまで複数回答可)

質問項目	回答分類	回答数	備考
家族とよく行く場所	店	85	未回答 2名
	習い事	13	
	祖父母宅	12	
	公園	9	
	学校	6	
	その他	12	
子どもだけでよく行く場所	公園	27	未回答 26名
	店	14	
	友人宅	14	
	学校	4	
	荒川	3	
	その他	3	

これらを受けて、本研究では、どの児童も共通の認識から学び始めやすい「学校」を学びの出発点にすることとした。距離的・空間的なフィールドではなく、児童の心理的なフィールドとしての「つながり」を重視し、常に学校から周りを見ることで身近と感じる学びが実現するように配慮し、児童が共通の土台に立つことができる「学校」を中心とした地域を研究対象として設定した。

4. 児童の実態

児童は第2学年の生活科でまちたんけんを行い、身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉えてきている。第3学年1学期では社会科で町探検を行い、土地の使われ方の違いなど社会的事象に着目した学びをしてきている。学校の周りを南北に分けて2回の町探検を行った際は、南側は住宅地化が進んでいるが、かつての区画整理された農地の面影を残している状況を見だし、「田畑の多い所」「大きなお店もある所」といった発言が見られた。「田んぼの周りには川がある。水を入れるためかな」「元々は家も畑のあった場所だったのかもしれない」など、社会的事象同士を結びつけて考える姿が見られた。一方で、自らも地域の一員として考えるという目標は、この單元では設定されていなかった。

また、前述のアンケートでは、近所で挨拶をする人や知っている人がいない児童が約20%、地域の行事への参加意欲がない児童が10.6%であり、地域との「つながり」が希薄な児童が一定数いる(表2)ことがわかった。

表2 アンケートの結果(%)

質問項目	肯定	否定
挨拶や話をする人がいる	78.8	21.2
近所の人の顔や名前を知っている	80.3	19.7
地域の行事に参加したことがある	89.4	10.6
地域の行事に参加したい	83.1	16.9

参加意欲がないと回答した児童も、地域に対する印象の自由記述では、「楽しい」「大切」「離れたくない」といった肯定的言葉を寄せていた(表3)ことから、決して否定的に地域を捉えているのではないことがうかがえた。

一方で、自由記述には未記入の児童が11名いた。様々な要因が考えられるが、これらの児童は、地域そのものへの認識や、その一員であるという自覚が、十分に高まっていないとも考えられる。

さらに、地域に対する関心を調べるため、地域出身の有名人について訪ねたところ、力士9名、プロサッカー選手1名の名前が挙がった。両者とも校内に紹介掲示があるにも関

ならず、66人中10名しか回答できなかったことから、地域に対する関心は高くないと思われる。なお、本研究で扱った小宮山清三についても紹介掲示はあるが、名前は挙がらなかった。

これらから、対象児童は地域を好意的に捉えてはいるが、地域に対する認識や関心は低いという実態が浮かび上がってきた。

表3 アンケートの結果(人：自由記述)

質問項目	分類	回答	回答数	回答	回答数
あなたにとっての家や学校の周り	肯定的言葉	楽しい	12	すてき	1
		大切	5	仲がいい	1
		友だち	5	景色がいい	1
		やさしい	4	幸せ	1
		いい	3	落ち着く	1
		きれい	2	元気	1
		住みやすい	2	離れたくない	1
		わくわく	1	便利	1
	うれしい	1	おもしろい	1	
	否定的言葉	騒がしい	1	線路が近い	1
	環境に関する言葉	静か	2	自然	1
		店がある	1	草花	1
		家が多い	1	遊具	1
		広い	1		
その他	勉強	1	いつも	1	

なお、内閣府が18歳以上に行った調査(2020)では、中都市において「現在の地域での付き合い」に関する質問項目で否定的意見が34.3%と報告されている。この調査は18歳以上に行われた調査であり、一概に比較はできないが、同様の否定的意見の多い傾向がこの地域の児童にもあてはまると考えられる。

しかし、対象校では、保護者による学習支援活動や登下校を見守る「安全安心パトロール」、同窓会組織である「校友会」といった活動が活発に行われていることから、こうした活動が盛んではない地域の児童の「つながり」についての意識の状況は、さらに危惧されるものと考えられる。

5. 研究の方法

(1)対象校

山梨県公立小学校

(2)対象児童

第3学年児童(2クラス)

(3)授業実践

①単元名

「火事からまちを守る」総時数11時間
(教育出版 小学社会3 P92-P111)
総時数11時間

②単元目標

- ・消防署や消防に尽力した先人の働きについて、人々の生活との関連を踏まえて理解するとともに、調査活動、具体的な資料を通して、必要な情報を調べまとめる技能を身に付けるようにする。
- ・消防署など関係機関の相互の関連や、人々の生活との関連、そこに従事する人々の働きについて考え、考えたことを表現する力を養う。
- ・消防署や消防に尽力した先人の働きについて、主体的に学習の問題を解決しようとする態度や、よりよい社会を考え学習したことを社会生活に生かそうとする態度を養うとともに、地域社会の一員としての自覚を養う。

③実践内容

授業実践は全11時間の内、9時間目からの3時間を行い、指導にあたっては、次の2点に留意した。

1点目は、主体的な学びの実現のため、教材・教具と児童の経験や知識とを結びつけることである。児童の経験や知識はそれぞれ大きく異なるという認識に立ち、共通の話題となる学校内の事象を扱った。

2点目は、地域人材の活用を図ることである。教師が語るのではなく、地域の方から話を聞くなど対話的に学ぶこととした。2時間目にはゲストティーチャーを招き、講話から学ぶ場を設定した。3時間目には地域の消防団員へのインタビューをもとにしたパネルから、その思いを学ぶ場を設定した。なお、ゲ

ストーリーチャーの豊富な知識や語られた教材への思いが児童の実態やねらいからずれないよう打ち合わせを複数回行った。

(4) 地域素材の教材化

本研究における教材化の手だて及び視点については、次の3点(図2)とした。これらの手だては、教材化を行う教員がもつ地域への理解や児童の実態から浮かび上がる課題などによって教材化へのアプローチが変わっていくと考えた。特に、授業構想を進める段階においては、3点を相関的に進めていくことに留意した。

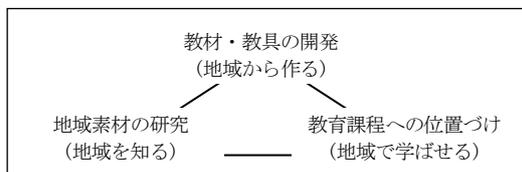


図2 教材化の手だて及び視点

公立学校の教員は、人事異動がつきものであり、在勤地域を熟知しているとは限らない。そこで、本研究においては、指導するために、まず教員自身が地域を知る必要があると考え、教材化のスタート地点として位置づけた。

地域を知った上で、指導する子どもたちの実態と照らし合わせながら教材・教具の開発を進めていった。今回は、第3学年の教育課程を俯瞰し、消防の学習に関連して、地域を守る人々の思いに関する地域素材を探すこととした。さらに、その地域素材から何を学ばせ、教科のねらいを達成するために何が必要かを見極めながら教育課程への位置づけを行い、授業構想の段階においては3点を相関的に進めていった。

① 地域素材の研究(地域を知る)

対象地域は、荒川の東側に位置し、明治期に行われた大規模な農村改革によって、貯水池や用水路が整備された稲作を中心とする農業地帯であり、養蚕や畜産業、果樹栽培も行われていた。

こうした調査の中、対象地域において中心的に活躍していた小宮山清三(1880~1933)と出会い、第3学年の消防に関する学習における地域素材として扱うことを計画した。

小宮山は、明治・大正・昭和の時代にまたがって多方面に活躍した対象校にもゆかりの深い人物である。34歳で村長となり、村内の消防組頭も務めている。さらに、県議会議員、議長にまでなっている。



小宮山清三 肖像
(甲府市立池田小蔵)

消防に関する活動としては、村内の消防組頭としてだけではなく、山梨県の消防組織を作り上げ、さらに大日本消防協会といった全国組織の設立にも関わるなど、日本の消防近代化に大きく貢献した人物である。消防に並々ならぬ熱意をもち、著書では、それまでの消防を見直して自治体を守ることと消防をつなげた自身の消防理論を提唱し、精神的に取り組んだ。こうした姿から「消防の父」と称されている。また、木喰仏を柳宗悦に紹介した人物としても知られている。

53歳で病に倒れ、その功績から県下初の消防葬が舞鶴城公園で執り行われ、その後、有志により「護郷立国」と彫られた頌徳碑が地域に建てられた。現在の地区消防団にも、その功績は伝えられている。

対象校においては、郷土資料室に人物を伝える様々な資料が残されており、戦後に市内小学校唯一の少年消防クラブが設置される際の原動力となったという記録も確認できる。

② 教材・教具の開発(地域から作る)

山田(2019)は、教材を「指導する教師と学習する児童・生徒を結ぶ役割を果たすとともに、現実の社会、言い換えれば日常生活と学問の世界とを結ぶ役割をもつもの」、教具を「指導する際に必要な道具」としている。本研究ではこの概念を採用し、教材と教具を分けて考え、教材を教科のねらいを達成するための事実や事象、教具を指導するとき使用する道具とする。

「消防署や消防に尽力した先人の働きについて、人々の生活との関連を踏まえて理解」し、「地域社会の一員としての自覚をもつ」という単元目標を達成するために、「小宮山の地域を守ろうとした思い」を教材とすることに

した。(表4)

教具については、多くの児童の目に触れている校内のものを取り上げ、ICT機器で視覚的に資料を提示するとともに、具体物も用いることで児童の興味を高める工夫を行った。

表4 ねらいと教材・教具

時間	ねらい	教材・教具	提示方法	出典等	
9	よりよい社会を考え、地域社会の一員としての自覚を養う。	「小宮山の地域を守ろうとした思い」	法被	実物	消防団
小宮山の肖像			パネル	郷土資料室	
昔の街並み			パネル	書籍	
10	よりよい社会を考え、地域社会の一員としての自覚を養う。	「小宮山の地域を守ろうとした思い」	人口変化	パネル	統計
葬儀様子			ICT	新聞	
航空写真			ICT	国土地理院	
11	よりよい社会を考え、地域社会の一員としての自覚を養う。	「小宮山の地域を守ろうとした思い」	年表	ICT	副読本
纏			実物	郷土資料室	
木製ポンプ			実物	郷土資料室	
			ゲストティーチャー	講話(ICT)	地域人材
			消防団員の話	パネル	消防団
			少年消防士の像	パネル	校内

③教育課程への位置づけ(地域で学ばせる)

本研究が対象とした消防に関する学習は、学習指導要領改訂に伴い、対象校の教育課程において第4学年から第3学年に移行した単元である。これまで第4学年で行われていた学習内容をそのまま行うのではなく、第3学年の実態に合わせて位置づける必要がある。

4で述べた児童の実態を踏まえ、「小宮山の地域を守ろうとした思い」や消防団の前身である消防組に関連させ、単元における消防団についての学習を踏まえて、自分たちにできることを考える学習の部分に位置づけることとした。単元内に3時間設定し、資料から小宮山が消防に力を入れてきたことやゲストティーチャーの講話から小宮山の地域を守ろうとした思い、現在活動する消防団員の話から受け継がれてきた思いを知ることで、自分たちにできることを考える授業を構想した。

(4)検証

①パフォーマンス評価

3時間目で、これまでの学習を受けて、小宮山に手紙を書くという設定で、手紙の中に

自分の考えを表出させ、ルーブリック(表5)を用いて評価した。記述内容から「地域やふるさと(命やくらし)を守ることに着目して、自分たちにできることを考えようとしているか」を見取り、児童の社会形成への参画意識としての「つながり」の高まりが見られたかを検証した。

表5 パフォーマンス評価ルーブリック

	レベル1	レベル2	レベル3
着目	地域に着目していない。	消防だけでなく地域に着目している。	地域を守る思いが受け継がれていることに着目している。
考え	感想をもっている。	自分にできることを考えているが地域を守ることに考えが及んでいない。	地域を守ろうと考えている。

その結果(図3)、地域やふるさと(命やくらし)を守ることに着目した記述では、小宮山の思いから地域に着目する記述が見られた。

また、自分たちにできることを考える記述では、消防活動に対して具体的な意欲が見られたが、地域を守るという視点にまでは考えが及んでいなかった。

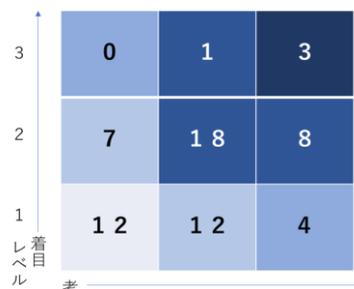


図3 ルーブリック評価の結果

②教材の検証

地域素材の教材化によって、児童の社会形成への参画意識としての「つながり」が高まることに至ったかについて3名の抽出児の記述内容から検証を行った。なお、以下、事前アンケートは「あなたにとっての家や学校のまわり」に対する回答、1, 2時間目は学習感想, 3時間目は小宮山への手紙の記述内容である。

(A児の記述の移り変わり)

- ・事前アンケート
「たいせつな所」
- ・1時間目学習感想
(小宮山は)「また大きな火事が二度と起きないように消防に力を入れて取り組んだ」

<ul style="list-style-type: none"> ・2時間目学習感想 「小宮山さんは池田村を守るために消防団を作っ てすごい人だなと思った。いろいろなことを してすごい人だと思った。」 ・3時間目小宮山への手紙 「小宮山清三さんは消防団を作ったり地いき といのちを守ってすごいと思いました。小宮山 さんは地いきを守ろうという思いから消防団 を作ってすごいと思います。ぼくも小宮山清 三さんみたいに地いきを守ってみたいです。」
<p>(B児の記述の移り変わり)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・事前アンケート 「子どもが仲よくあそんでいる所」 ・1時間目学習感想 「昔は人口が少なく家が木でできていたこと が分かった。火事からまちを守りたかったか ら力を入れて取り組んだ」 ・2時間目学習感想 「消防の父と言われていた小宮山清三さんは すごい努力していろいろなことをしていたん だなと思った。いろいろなことを考案した人 だと言うことを知った。」 ・3時間目小宮山への手紙 「小宮山さんはすごいいろいろな所を作っ たり、地区のだいひょうになったりといろ いろなことをしてくれてありがとうございます 。僕は大人になったら少年消防団をふっか つさせたいなと思います。小宮山さんがい たから今のような消防があると思いました。 小宮山さんはすごく、今のくらしや消防に かんけいしててすごい人だなと思いました。 これからの1年生に知らせたいです。小宮 山さんがいなかったら今も多くの命が火事 によってうしなわれていたかもしれません。 ぼくも大人になったら地いきの消防団に入 りたいです。」
<p>(C児の記述の移り変わり)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・事前アンケート 「さわがしい所」 ・1時間目学習感想 「小宮山清三さんが消防署を作ったのがす ごいと思った。消防がないと燃えて大変な ことになるから」 ・2時間目学習感想 「小宮山清三さんがいろいろまちを作っ てすごいと思いました。」 ・3時間目小宮山への手紙 「自分はこれから火事がおきたらひん や自分ができることをやっっている守る。 小宮山清三さんは消防しよに力をいれた のはすごいと思いました。ふるさとをつ くったのもすごいと思いました。」

A児は事前アンケートでは、地域を大切に捉えていた児童である。学習を進めるとともに、小宮山に着目して地域を守る視点が見られるようになった。

B児は事前アンケートでは、自分の生活視点で記述していた児童である。3時間目の小宮山への手紙では、消防活動にのみの着目となっているが、自ら消防団への参加意欲を記述し、学んだことを他者へ知らせようという意欲が見られるようになっていく。

C児は事前アンケートで否定的意見を記述した児童である。学習を通して、小宮山の思いに触れることで、自分にできることをする

という記述が見られた。

これらの児童の記述の移り変わりから、地域素材の教材化によって「つながり」の高まりが見られ、小宮山を通して地域を好意的に捉えるようになったことが明らかになった。

③地域人材活用に関する評価

今回の実践では、2時間目にゲストティーチャーを招聘しての講話、3時間目に消防団員へのインタビューをパネルにした資料を用いた。2つの形による地域人材活用が、児童の社会形成への参画意識としての「つながり」を高めることにつながったか検証を行った。

【2時間目 ゲストティーチャー】

1時間目のワークシートの記述量と比較し、13%記述量が増えている。学習感想欄とは別に、自由記述欄には、話を聞いて分かったことや感想を書き留めている児童も多く、実際の記述量はより多くなっている。

また、内容においては、消防に関連した記述が多い一方で、地域を守ることに
関する記述も同等に見られた。事前の打ち合わせで、小宮山の地域を守る思いを中心とした授業の流れに沿った講話となった。小宮山の消防以外の偉業については口頭で触れる程度にとどめたが、児童は生活の中で知っている建物や企業に反応し、感想では地域の発展への努力に着目する児童もいた。

【3時間目 消防団員の話】

直接話を聞くのではなく、インタビュー内容を文字にしたパネルで提示した。2時間目に学習した小宮山の思いが現在も受け継がれていること、過去の出来事ではなく今の課題として捉えること、自分に引き寄せて考えることなどができるよう、補足説明も行った。

しかし、直接話を聞くことに比べ、資料の学習効果を十分得ることができず、小宮山の思いが今に受け継がれていることに着目した児童は4名に留まった。

この2事例から、地域人材は、その活用方法によって効果が大きく変化することが明らかになり、今後の留意点とすることができた。

6. 成果と課題

本研究の成果として、地域素材の教材化による社会形成への参画意識＝「つながり」について有用性が明らかになったことが挙げられる。また、教材化した地域素材を展開するにあたり、地域人材を活用することで学習がより効果的に働き、児童の「つながり」の高まりが期待できることがわかった。児童は、学習を通して地域を好意的に捉えるようになり、地域社会の一員としての自覚をもつ過程で、誇りと愛情も育まれてきたと推察される。

課題と改善策を2点挙げる。1点目は、扱った人物の魅力や業績から人物そのものへの関心が強くなりすぎた面があることである。消防に焦点を絞って授業構成をしたが、教材を通してどのような教科のねらいに迫っていくのかを、さらに明確にする必要があった。魅力ある教材であるほど、注意しなければならないと考えられる。

2点目は、一から地域素材を掘り起こして教材化を行うには、ねらいに沿った資料が容易に得にくいことや教材化に係る時間が膨大となってしまうことである。これに対しては、各校で積み重ねられてきた実践を生かし、引き継いでいくことが重要となる。その実践から教師自身も学び、その時の実態に合わせて実践し、整理して次年度へ引き継ぎ、その学校ならではの地域教材として教育課程へ位置づけていくといったことが求められるだろう。また、博物館と連携したり、地域人材や地域在住教職員に協力を願ったりすることも有効と考えられる。何より、教師自身の地域とのつながりが、教材化への手がかりとなるはずである。教師自身が地域を学び、地域とのつながりをもつことの重要性を提起し、まとめとしたい。

7. 謝辞

本研究を進めるにあたり、貴重な授業実践の機会を与えてくださり温かくご指導くださった連携協力校の先生方、ゲストティーチャーとしてご協力いただいた土肥満先生、地区

消防団の皆さんに厚く御礼申し上げます。

8. 引用・参考文献

- ・本多千明(2014)「社会科教育における社会参加学習に関する一考察」『武庫川女子大学大学院 教育学研究論集 第9号 2014』
- ・梶島邦江(1994)「子どもの生活空間と通学区区域」『学校と地域のきずな：地域教育をひらく』葉養正明 編 教育出版
- ・甲府市立池田小学校編(1954)『池田地誌』
- ・小宮山清三(1923)『農村消防の革新』大日本消防学会
- ・文部科学省(2020)社会に開かれた教育課程資料 https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/_icsFiles/afieldfile/2020/01/28/20200128_mxt_kouhou02_03.pdf (2020/08/17 閲覧)
- ・文部科学省(2017)『小学校学習指導要領解説社会編』
- ・内閣府(2020)「令和元年度社会意識に関する調査」<https://survey.gov-online.go.jp/r01/r01-shakai/index.html> (2020/11/05 閲覧)
- ・ロジャー・ハート著、木下勇、田中治彦、南博文監修、JPA 日本支部訳(2000)『子どもの参画-コミュニティ作りと身近な環境ケアへの参画のための理論と実際-』萌文社
- ・総務省(2020)令和元年通信利用動向調査 https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/statistics/data/200529_1.pdf (2020/07/11 閲覧)
- ・青少年のための山梨県民会議編(1974)『郷土史にかがやく人々 集合編』
- ・山田均(2019)「児童の学習を深める教材研究 児童の見方・考え方を育てる教材とは」『奈良学園大学紀要』10 奈良学園大学
- ・山梨県教育委員会(2018)やまなしの教育に関するアンケート調査 <http://www.ypec.ed.jp/htdocs/wysiwyg/file/download/1/541> (2020/08/02 閲覧)
- ・「甲斐の新風土記」『山梨日日新聞』(1933年6月6日)
- ・山下智也(2009)「子ども参加論の課題と展望」『九州大学心理学研究』10 九州大学大学院人間環境学研究院